

あれから2年

今日は6月30日。今年も半分が過ぎたわけで、明日から「後半戦」に入る。じつに早いものだ。

この日で思い起こすのは、2年前のことだ。長らく勤めた大学の同僚、石川洋明さんが亡くなった。たしか月曜日だった。2日前の土曜日、名市大滝子キャンパスで卒業生の名古屋市職員らと「勉強会」があった。その際、吉田一彦さんから、石川さんが前日に市大病院に入院したことを聞いた。予想していたが、あまり良くないようだ。月曜日に見舞いに行くつもりが行けなかった。あとから聞いたが、容態が急変して、その日の早朝に亡くなった。

それから、お通夜、告別式へと続く。退職から3ヶ月であり、石川さんのことが気になっていた。同僚らに聞くと、石川さんは金曜日の午前まで講義をしていた。その後に容体が悪くなったという。退職する頃、石川さんは「夏まで?」と聞いていた。わたしの退職の日、石川さんから届いたメールに、それらしきことも書かれていた。

2月22日の「最終講義」のことも思い出される。石川さんは北風が吹く寒いなか来てくれ、階段教室の中ほどで、彼らしく熱心にメモを取っていた。亡くなって半年後に、中日新聞に5回連載された辛く悲しい記事のことも。

写真は2年前の3月14日の「学科送別会」である。晩年の石川さんらしい写真だ。阪井芳貴さんの手配による沖縄料理のパーティだった。石川さんは固いものがまったく食べられなかったが、喜んで参加してくれた。このときの大学から会場の御器所までの「道中」も、忘れられない。わたしへの「別れの言葉」を涙なくして聞けなかった。

石川さんの死をきっかけに、中断していたレポートを復活させた。いまでも毎朝書いている。石川さんのことを10回にわたりレポートにし、それをもとに「追悼文」としてまとめた。2700字余りになった。一つの「区切り」として今年の今日、原稿を編集事務局に送った。あれから連絡がないので、編集作業に手間取っているだろう。石川さんも催促しているのではないか。

時々、石川さんのことを思い出す。彼なら「どう考えるのだろう」と。いじめや児童虐待、名古屋市の岩城副市長「解職騒動」、4月に施行された「障害者差別解消法」のことなどだ。



(2016年6月30日)